The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞荒木浩著『かくして『源氏物語』が誕生する 物語が流動する現場にどう立ち会うか』
Author(s)	瓦井, 裕子
Citation	語文. 2014, 103, p. 59-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70946
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

荒木浩著『かくして『源氏物語』が誕生する　物語が流動する現場にどう立ち会うか』

瓦　井　裕　子

本書第六章は「〈非在〉する仏伝」と付けられた。重要な構想を仏伝に拠り、それを表向きには表現しないことで、読者にその存在をより強く意識させる。それを〈非在〉と呼ぶのだが、この〈非在〉は、本書を貫くテーマでもある。しかし、表現されないものをどう論証するか。氏は当時共有された知識から、また後世の享受から、それを紐解いてゆく。その方法は、中世文学の研究者だからこそ、というよりも荒木氏にしか出来ないもので、膨大な知識の海から拾い上げられた資料が織りなす展開に、瞬く間に惹きつけられる。

氏の論は、その結論もさることながら、論の展開もすばらしく魅力的なので、要約はほとんど意味をなさない。しかし、本書の多岐にわたる内容をその一端なりとも記すため、以下に目次を挙げ、内容を簡単にまとめた。

Ⅰ

第一章「玄宗・楊貴妃・安禄山と桐壺帝・藤壺・光源氏の寓意」／第二章「武恵妃と桐壺更衣、楊貴妃と藤壺―桐壺巻の准拠と構想」／第三章「〈北山のなにがし寺〉再読―若紫巻をめぐって」／第四章「胡旋女の寓意―紅葉賀の青海波」／第五章「胡旋舞の表象―光源氏と清盛と」

Ⅱ

第六章「〈非在〉する仏伝―光源氏物語の構造」

Ⅲ

第七章「宇治八の宮再読―敦実親王准拠説とその意義」／第八章「源信の母、姉、妹―〈横川のなにがし僧都〉をめぐって」

第一章・第二章は、桐壺巻の准拠を扱う。長恨歌の裏側に存在した玄宗・楊貴妃・安禄山の三角関係をめぐる当時の共有知識を顕在化する。桐壺巻前半にしか力を及ぼさないと考えられていた長恨歌を、その知識に照らすとき、藤壺が楊貴妃として浮かび上がる。『源氏物語』の根幹をなす人間関係を根本的に捉え直し、玄宗・楊貴妃・安禄山の物語が、作品の構想に大きく関わっていることを明らかにする。

第三章は、〈北山のなにがし寺〉の比定を行う。先行研究を徹底的に洗い直し、それぞれを有機的に結び付けながら、近年否定的に捉えられている鞍馬山説の再評価を行う。先行研究の肝要とするところを抽出し、新たな研究史を描き出す。

第四章・第五章は、安禄山と楊貴妃が得意とした胡旋舞を扱う。第四章は、胡旋舞の分析から、王権を前にして「おほけなき心」を軸に舞われる舞が、安禄山・楊貴妃、源氏・藤壺に共通することをあぶり出す。この構図が遠く柏木巻にも実現され、それによって逆照射される紅葉賀を現前させる。語らないという方法によって読者により強く意識させる作為が、確かな読みによって、

圧倒的な説得力をもって迫ってくる。

第五章は、前章をうけて、後世の『胡施女』受容から『源氏物語』との関係を読み解く。当時、作者と読者の間で共有されていた『新楽府』に対する知識に基づけば、作中で明示されない『胡施女』の引用が現前すると説く。

第六章は、仏伝・太子伝・源氏の類似を横断的に検討し、その類似点と相違点を明らかにする。その中から六条院と三時殿の共通性を見出してゆき、三時殿の季節観を援用することで、矛盾が生じると考えられてきた六条院四季の町の配置を読み解く。仏伝を裏返したところに源氏が誕生したとし、釈迦のパラレルワールドとしての源氏を描き出す。そして死後もまた、六条院・薫・匂宮に仏伝を用いた造形が継承されていくことを指摘する。

第七章は、宇治八の宮の准拠を論じる。『源氏物語』の諸本を見渡し、音楽と八の宮が分かちがたく紹介される本文を優勢とした上で、宇多天皇第八皇子敦実親王をその准拠とする。敦実親王と宇治の関係を述べ、親王が皇位継承の重要な候補者であったことを宝剣の説話より読み解く。その説話の伝来に倫子の父が関わったことを指摘し、第一読者である道長一家の存在が、『源氏物語』に投影されたことを述べる。

第八章は、横川のなにがし僧都とその家族の准拠を論じる。准拠とされる源信をめぐる説話を引きながら、先行研究の見落としてきた母のための下山という行為の一致に着目する。『河海抄』『今昔物語集』『古事談』『撰集抄』など多彩な資料を有機的に結び付けながら、『源氏物語』執筆当時の理解に徐々に分け入っていく方法は、見事というほかない。

「こうした受容の様相から、逆照射される『源氏物語』の影像がある」――ある現象をめぐる中世の事例を多彩に引きながら、本書はやがて『源氏物語』へ遡及していく。その中で、やがて初期の読者たちが浮かび上がってゆき、読者の存在によって「誕生」させられる『源氏物語』が立ち現れる。

本書は「圏外の『源氏物語』」というフォルダから生まれたという。あとがきには『源氏物語』の著書を出すことへの躊躇が記されている。しかし、中世から遡行して発見される『源氏物語』に、瞠目せずにはいられない。

この本の内容が、自明のことで満ちている、と思ってもらえたとすれば、それはむしろ、本望というべきだろう。「圏外」に留まらず、常識として受容され、凡庸の名の下に忘れ去られることこそ、研究書として、一つの大きな幸福である。本書は未だ非凡というほかない。読み終ったとき、私たちの前にこれまでとはまったく異なる『源氏物語』が現れる。

（笠間書院、二〇一四年三月、四〇五頁、三、九〇〇円）

（かわらい・ゆうこ　本学大学院博士後期課程）